

イライラする。なんで私だけ。そう思う。

「おかあさん、これ食べたくない」

「ええ？昨日食べた言って言ってたじゃない。おいしいからがんばろ？」

「おかあさん、プリンセスのタオルがいいって言ったのに」

「そうだっけ。後で引き出しの中から自分でとれる？とりあえずパン食べて」

「おかあさん、コーヒーまだ？」

「……はあ」

毎朝、戦争だ。3歳と5歳の女の子と、35歳の長男。私は夫と同級生だし、長男なんて産んだ覚えはないのに、一番手のかかる甘えん坊ときた。無言でインスタントコーヒーの瓶を目の前に置いてやった。

お弁当♡つ詰める合間に、ダイニングテーブルの様子を伺う。子ども達は少しずつではあるがちゃんと食べてくれる。アスパラガスとプチトマトを彩りよく並べやっとな完成だ。

「お弁当完成！」

次はお箸とランチョンマットと…と準備しようとするときまた声がかかる。

「ねえ、コーヒーはまだ？」

「おとうさん、じぶんでしなよお」

長女のリナにさえ呆れられているダイスケはまだスウェットで、ぼさぼさの髪の毛のままテレビを見ている。

もう何も言う気も起きず、マグカップにインスタントコーヒーを、適当に、むしろ多く入れてやった。苦くて悶絶しろ。お湯を入れてからダンッと嫌味のように音を立てて目の前に置いてやったのに、「ありがとお」なんてへらへら笑う。ああ、イライラする。できるだけ夫を視界に入れないように娘たちの幼稚園の準備をする。やっとな朝食を食べ終わった次女のミホのトイレや着替えを手伝い、二人の髪の毛を結ってあげる。

バタバタと準備をしてもう∞時半である。いまだ食パンを半分も食べていない夫のスーツとシャツ、ネクタイ、靴下をリビングのソファに置いておく。

「水筒、帽子、忘れ物はないかな？」

「はい」

二人声をあわせてする返事を聞いてからそれぞれにヘルメットを被せる。

「いってきまーす」

玄関でそろってご挨拶をするというのに、夫は「んー、いってらっしゃい」という気の抜けた声をリビングから返したただけだった。

前と後ろにチャイルドシートをつけた自転車にそれぞれ乗せる。この自転車は佐賀に引っ越してきてから買った。フラットで直線の多い佐賀の町は自転車移動に適していて、車を出すより手っ取り早い。リナは〇月生まれなので、卒園ギリギリまで自転車で通園させることができるのも購入の決め手だった。

〇月の朝は爽やかで、自転車に乗って感じる風は心地よかった。けれど、心は鬱々としたままで。

幼稚園から戻りマンションの一室に戻ってまた溜息をつく。

テーブルに残された食器。脱ぎ捨てられたスウェット。テーブルには忘れられた弁当。思わずキーケースを放り投げた。

佐賀にはつい一ヶ月ほど前に越してきたばかりだ。理由は夫の転勤。

転勤はいつかはしないとけないことはわかっていたけれど、それはまだ先の話、さらには場所も関東のどこかだと聞かされていたので、まさに青天の霹靂だった。

その時は私も正社員としてフルタイムで働いていたが、子どもが幼い時に家族が離れて暮らすのはよくないだろうと、泣く泣く仕事を辞めた。

そして、それまでは九州とは縁もゆかりもなかったのに、何の情報もないまま住居を探し、幼稚園を探し、引っ越し業者を探しと何もかも手探りで行った。主に私が。夫は何もしなかった。

引っ越してきたらきたで、幼稚園も中途入園ということでもママ友なんてできずにずっとぼっち。公園でもどこでも。まあ、これは私の積極性の無さも原因だとは思うが。

繋がりがあるのはこの家の中だけ。出かけるのは幼稚園とスーパーだけ。仕事だって辞めたくなかった。へらへら笑うだけの夫には何一つ私の気持ちなんてわかってないのだろう。なんで私だけこんな思いをしなくてはならないのか。

洗濯ものを干し終えて空を見上げる。気持ちいいはずの青空もなんだか私の事を嘲笑っているかのようだった。

「おかあさん、おでかけだった」

日曜日、昼食の片づけをしているとミホが洋服の裾を引っ張りながら話しかけてきた。

「え？おでかけ？」

「うん、おとうさんが、そういってる」

はあ？これから？

リビングで趣味のカメラをいじっているダイスケに声をかける。

「ねえ、おでかけて何？」

「ちよっと、みんなでドライブしてみようかと思ってさ」

「は？どこ行くつもり？」

「ん〜、玄海町」

「どこ、それ？」

「唐津の方。まだ行った事ないじゃん？行ってみようよ」

「ていうか、今から？なんで？」

「まあまあいいじゃん。リナもミホも行きたいよなあ？」

「いきたい！」「い〜い〜」

子どもははしゃいで飛び回る。ナマケモノのような父親でも子どもたちは大好きだから、一緒にお出かけとなると大喜びだ。

しかし、日曜のこの時間から遠出をすると帰りも遅くなり、寝るのも遅くなる。生活のリズムがくるってしまうのは嫌だ。

そうは言っても、ここでお出かけをやめさせると二人とも機嫌が悪くなりぐずりが止まらず、私が大変になるだけだろう。子どもを味方につけるとは卑怯な。

大きく溜息をつく。ここでグダグダするよりはさっさと出掛けた方が賢明か。

「じゃあ、早く準備するよ。競争だ！急げ！！」

手を叩き、声をあげて駆けていく子どもたちの後を追いお出かけ準備を始めた。

思ったより玄海町は遠く、辿り着くまでにリナもミホもたっぷりお昼寝をしてしまった。

「ねえ、ナビはこっちの左の山側を指してるけど。なんで唐津の方に行くの？」

「こっち方面は初めてだろ？せっかくだから海見ながら行こうと思って」

「遠回りだよ？」

「目的地に着きたい時間にはまだ余裕があるからだいじょーぶ」

「時間？」

道路の凹凸で車が揺れた拍子に、後部座席の子どもたちが起きたようだ。

「どこどこお？」

「のどかわいた」

「じゃ、道の駅探してソフトクリーム食べよっか」

「やったあ！！」

時間が決まっている目的地？もう4時ですが…？疑問を投げかけてものらりくらりと躲かれる。ま、いいや。珍しく父親らしいことをしているんだからと思ひ直し、ナビで道の駅を探すことにする。

途中、約束通り道の駅でソフトクリームを食べて、また車に乗り込む。

「いろんな武将の名前があって面白いね、この道」

「ほんとだよな。400年以上前の有名な人たちがここにいたかもって思うと、なんか感慨深い」

そんな話を話しながら、外津大橋を渡る。右手側に何か施設が見える。公園か何かかと思っていると、道路の案内標識に「原子力発電所」の文字が。

「ねえ、原子力発電所って書いてるけど」

「玄海原子力発電所っていうじゃん。玄海町にあるよ、そりゃ」

「こんなに近いの？もっと遠くにあるのかと思ってた」

「近いよ。うちと直線距離で50kmくらいかな」

「そんなに？」

「そんなに。」

ダイスケは平然と答える。私は知らなかった。原子力発電所がこんなに近いところにあったことも、玄海町の景色の一つとしてあることも。

「怖くない？」

「なんで？」

「だって、原発だよ？」

「でも、これのおかげで電力が供給されてる」

「そうだけだよ」

「俺も詳しくはないけどさ。原子力が100パーセントいいとは思ってない。あの震災は怖くなって思ったよ。でも、原子力に頼らざるをえない現状がある。その現状に甘んじないで、地球にとつても俺たちにとつてもベターな未来を考えることが、怖がることより必要だと思うな」

驚いた。あのダイスケがこんな風にしっかりした考えを持ってるなんて。

「ま、でも、地震がないように切に祈ってるけどなあ」

へへっと笑うダイスケはいつもの顔だったけど、久しぶりに横顔がかっこいいだなんて思った。

それからしばらく車を走らせると、なんだか車が多く泊まっている駐車場があった。

ダイスケはハンドルを切り滑らかに駐車場に入ると、運よく端っこの方に1台だけ空いていたのでそこに停車した。

「浜野浦の柵田の展望台？」

子どもたちを車から降りして手を繋ぎながら問いかける。

「そう。綺麗なんだから。」

ダイスケは趣味である撮影道具一式をセッティングし肩に担いでいた。

子どもたちが走り出そうとするのを押さえながら、階段を下りて展望台に行くと、そこには写真やテレビでしか見たことのない風景が広がっていた。

不揃いな形の細長い田んぼが階段のように積み重なっていた。海に面している下方は少し広い田んぼだけけれど、上に行くにしたがって細く小さくなっていく。ほんとに上の方はどうやって作ったのだろうかというほどの狭さだ。間違いなく機械なんて入らないだろうな。

「あちゃあ、みんな考えること一緒だよなあ」

そう言いながらダイスケは自分の構図に当てはまる場所を探す。どうやら展望台では人

が多いと判断したのか、上の駐車場の方に歩いて行った。こうなってはしばらく写真の事しか考えないので、私は子どもたちと散策することにした。

少しづつ空気が橙色に変わってきた。飛行機雲が長くたなびいている空も少しくすんだ勿忘草色になっている。棚田の向こう側の空は、朱鷺色に変わってきていて大きな夕日を迎え入れる準備をしているようだ。そして、海と水を張ったばかりの棚田は夕日を反射して煌めいている。

思わず手すりに身を寄せて見入ってしまった。少しづつ太陽は高度を下げ、海へと向かう。

「おかあさん、すごいキラキラ」

「まぶしいよ！おひさま、おっきなみかんみたい！！」

子どもたちも初めて見る光景に目を奪われている。

「ねえ、すごくキレイね。おかあさんも初めて見たよ」

しゃがんで視線を合わせると、もっと眩しく見えるような気がする。

「おかあさんもはじめて？わたしもはじめて！」

「あく、わたしもだもん！！」

「お母さんも、リナもミホも初めて見たね。みんなはじめて、一緒だねえ」

うふふと笑うと、二人もうふふと笑ってくれた。

「おかあさんとはじめてがいっしょ！」

「ね、いっしょ！！」

私と一緒に『初めて』経験することを、二人が満面の笑みで喜んでくれる。こんなに美しい『初めて』を親子で経験できたことに、なんでか泣きたくなった。

夕日が沈んでしまった後の空のグラデーションも見事だった。橙色が少しずつ薄くなり薄い桃色となり、今度は少しずつ葡萄色へとかわり、群青を経て、夜の色へと変わっていく。

美しいと思った。こんなに綺麗なもの久しぶりに見た。いつから見えないのだろう。

「随分熱心に見てるね」

ポンと肩を叩かれ我に返る。子どもたちはダイスケの足元をぐるぐる回っていた。

「あれ？写真は？」

「もう暗くなっちゃったからおしまい。途中からすぐそばで撮ってたんだけどな。気づかなかった？」

何時の間にか辺りは暗くなっていた。

「…うん」

「綺麗だったもんねえ」

「二人の手を離したことも気付かなかったなんて、母親としてヤバイよね」

二人に何かあったらと思うと、さあっと血の気が引いた。

「そんなことないよ。二人とも、俺が来るまで君の手をずっと握っていたよ。何より、

君がちゃんと躡けているじゃないか。大丈夫に決まってる」

「うん！おかあさんの手をはなさない！しらないひとについていけない！くるまのちかくにいかない！」

「ミホもちゃんとできるよ！」

「そっかあ。ふたりとも偉いね。ごめんね、お母さんぽおっとしちやった」

「いいよ！」

「うん、おててつなぐのすきだもん！」

「…ありがと」

二人をぎゅうと抱きしめた。

「さあて、おなか減ってませんかあ？」

ダイスケが明るい声でそう言うのと、「おなかすいた」「ペコペコ」と負けじと明るい声を返す子どもたち。

「よおし、次はご飯だ！」

ミホとリナを抱き上げてダイスケは歩き出す。しゃがみこんだまま動けずにいた私に振り返って、柔らかない声で呼ぶ。

「おいで。行こう？」

「…うん」

仄暗い駐車場をダイスケの白いシャツを道しるべにして歩いた。

ダイスケが連れて行ってくれたのは山の中ある焼肉屋だった。

「こんなとこに焼肉屋さんがあるんだ」

「前、仕事で来た時にランチ食べたんだけど、お肉がめっちゃおいしいのにお手頃だったから。絶対みんなで食べたいと思ってたんだよねえ」

「わーい、おにく！」

「おにく！！」

駐車場にまで漂う肉が焼ける香ばしい匂いにお腹の虫が鳴き止まない。いそいそと店内に入り、迷いつつも手早く注文した。

綺麗なサシの入った霜降りの佐賀牛盛り合わせと、子どもたち用のウインナーと、牛タンと。隣の座敷の「じゅうろう」っていい音が堪らない。今か今かと待ちきれない。

「お先にお飲み物をおもいました」

可愛い定員さんが障子を開けて、テーブルにノンアルコールビールとジュースをそれぞれ二つずつ置いて、私の方に向き直った。手にはピンクのカーネーション。

「本日は母の日ですので、お店からお母さんにプレゼントです。よかったらどうぞ！」
にっこり笑って私に渡してくれた。

「え、あ、ありがとうございます？」

「それではごゆっくりどうぞ」

さっと定員さんは障子の向こうに消えていった。

母の日？ そうだっけ？ と混乱していると、リナとミホが不満げな声をあげた。

「おとうさん、ははのひって、ばれちゃったよお」

「おかあさんをびっくりさせたかったのに」

「まあまあ、二人とも。今からでも遅くないぞ。ほら、準備して」

「は〜い」

何時の間にか持ってきていたリュックの中を二人でゴソゴソしてから、後ろ手に隠してこちらに寄ってくる。

「はい、どうぞ。せーの」

カメラを構えたディスクセイという言い終わるや否や二人から飛び掛かる勢いで何かを渡された。

「おかあさん、いつもありがとう」

それは水色の封筒に入ったお手紙と、ピンクの折り紙で折られた花だった。

「おかあさん、あおいろすきだから、これにしたの」

「ミホもがんばっておったの」

二人同時に、ふんすつと鼻息荒く話し始める。

「二人ともありがとう。すごくきれいなお花ね。お手紙も読んでいい？」

少し震える声で言う「いいよ！！」とにっこり笑顔が返ってくる。

封筒に貼っているのは二人がお気に入りのキャラクターで、大切にとっていたはずのシールだ。破かないように慎重に剥がして封筒から手紙を取り出す。

手紙は、お絵かき帳のページをちぎったもので、真ん中に茶色い何かを持っている笑顔の女の人とその左右に女の子がひとりずつ、端っこの上の方に黒いもじやもじやが描かれていて、女の人の下には「おかあさん だいすき」って書かれていた。

「おかあさん、いつもがんばっているからね」

「だいすきなチョコをかいたよ」

「こっちのピンクのリボンがミホだよ」

「こっちのむらさきのおはながついているのがリナ」

頑張ってこらえたけれど涙をポロポロ零しながらお礼を言う。

「ありがとう。上手に描けてるね。おかあさんもそっくりだし、二人もかわいい」

二人は顔を見合わせてえへへと笑う。

「このもじやもじやは？」

「ミホのかいたおとうさん」

「おとうさんがおきたところだよ」

「え〜、お父さんこんなもじやもじやかなあ」

動画機能で撮影をしながらディスクが会話に入ってくる。

「もじやもじやだよ」

「ねえ、おかあさん」

寝起きのダイスケを思い浮かべる、ふはっと笑いだしてしまった。

「そうだね。もじゃもじゃしてるね」

「だよねえ」

「ねえ」

3人で顔を見合わせて笑って、二人を抱き締めた。

「ありがとう、本当に嬉しい。大好きよ」

「らぶらぶね」

リナが言ってまた笑った。ダイスケは瞳を細めながら動画をずっと撮っていた。

「お待たせしました！佐賀牛盛り合わせです」

先ほどのかわいい定員さんが入って来て、見た目にも美味しそうなお肉を持ってきてくれた。同時に私とダイスケのお腹も鳴る。

「さ、早く食べようよ。もう我慢できないよお」

子どものようにお腹を摩りながらいそいそと席に着くダイスケに、3人で顔を見合わせてまた笑う。

「おとうさん、こどもみたいね」

リナが言うミホもうなずく。

「ミホのほうが、おねえちゃんだよ」

「ほんとねえ。さ、二人ともこのエプロンつけて。お肉を食べるぞ！」

「おぉ〜」

その日食べたお肉は、本当に美味しくくて、今まで食べた中でも上位に入るほどだった。

帰りの車の中では、リナもミホも眠ってしまった。昼間はこうなることが嫌だったから、私の機嫌は少し下降したのに、なんてことないと思える。

「母の日だったんだね、今日。」

「そお。だから、子どもたちがお母さん喜ばせたいって頑張ったんだよ」

「このドライブも？」

「これは、まあ、俺が考えたけどさ。こっちに来て、君は一人で頑張ってくれているのに、俺は何もしてあげられてないなって思っ。俺が佐賀に来て一番きれいだった思ったモノを見せてあげたかったんだ」

「そうなんだ」

「こんな事しかしてあげられなくてごめんな。けど、いつも感謝してるんだ。ありがとう」

「…うん」

手に持っている水色の手紙とピンクの折り紙の花が、カサッと音を立てる。

「こんな事なんかじゃないよ。すごく嬉しかった。私を頑張ってるって言ってくれて。」

そこまで言って気づいた。

そうか、私は認められたかったんだ。

一人きりで頑張ってると思ってた。誰もわかってきてくれないって思ってた。けど、リナもミホもありがとうって、がんばってるねって言ってくれた。

ダイスケも私を信頼して、私の育て方を尊重してくれていた事に今日気づけた。ちゃんとわかってくれていた。

誰かに、ううん違う、他でもない家族に自分が認められていたという事実が、胸をあたたく満たす。

夜なので道路はすいていて随分スムーズに帰ってきた。マンションまでもうすぐだ。

「さて、明日からも頑張りますかね！」

そう言っただけで伸びをしようと、ちらりとこちらを見たダイスケはにっこりと笑う。

「そうだね。美味しいお肉も食べたから、エネルギーは満タンだし」

「うん、きれいな夕日も見たから心の栄養も満タン。ありがとう」

「どういたしまして」

滑らかにハンドルをきり、すうっと右折する。ダイスケの運転で私たちは酔ったことがない。

「でもね、朝のもじゃもじゃは、ちょっと直した方がいいと思うの」

「え、そんなにもじゃもじゃしてないよ」

「とりあえずコーヒーは自分で淹れようか」

「君のコーヒーが美味しいんだよお」

「インスタントの特濃で苦いコーヒーでも？」

「それでも」

真面目くさってダイスケは頷く。

そんな風に甘えるダイスケを可愛いと思えること。私が考えてもいなかった、けれど大事な事にちゃんと自分の意見を持つてること。美味しいものや美味しいものをみんなで分かち合おうと思ってること。そんなダイスケを、私が愛しいと思った事。ごめんね、手のかかる長男なんて思ってた。

朝まであんなにイライラしていたのに、今はそんな風に思えるほど心は凪いでいる。

けど、しばらくすればまたイライラしちゃうんだろうなと、心のどこかで分かっている。

それでも今日の事を思えば、今までよりは楽になれるんじゃないかな。

そうだ、来年は、私から玄海町に行こうってお願いしてみよう。綺麗な夕日を見て、美味しいものを食べて、子どもたちから労いをもらって、今年みたいな素敵なお母の日にしてもらおう。だって、頑張るんだもの。うん、そうしよう。

思わずうふふと笑ったけれど、ダイスケは不思議そうな視線をちらりと寄こして、また滑らかにハンドルを切って駐車場へと向かう。やっぱり今日も車酔いなんてせず、無事にドライブは終わった。

もらった手紙と折り紙の花とピンクのカーネーション。そして、夕日のかげら。何一つ落とさないよう大事に抱き締めて、車を降りた。